体験通し自身を育てる

高校の教育旅行は大きく様変わりしてきた。単に見る行為から一歩進んで自ら五感を使って何かを感じ取る体験が主流となった。あるいは、核家族化で希薄になった人間関係を肌で感じる民泊も人気が高い。一方で、多感なこの時期だからこそ、日本の歴史や文化に触れて、知識と日本人の生き方を自ら感得する必要性が、グローバルな世界では改めて問われている。学校が求め、実施している旅行とはどのようなものか。目的や教育的意図、効果などを取材した。

川口市立 川口総合高校
和歌山・神戸　3泊4日　10年10月　実施

目的を3テーマに絞り日常と感動体験を融合

川口市立川口総合高校（金子保夫校長）は、10年10月25日から3泊4日の日程で、和歌山県串本町と神戸市への修学旅行を実施した。8クラスで総勢278人が参加した修学旅行について、生徒の大多数が実施後に抱いた印象は「ただただ感激」の言葉に集約されるようで、それが感動の実態を如実に物語っている。

同校の立地を概観すると、一言でいえば東京ナイズされた地域だ。かつて、キューポラ（鉄の熔鉱炉）で知られる鋳物や工業の盛んな地帯だったが、現在では「埼玉都民」の俗語さえあるように、工場跡地に住宅街が広がっている。また、日本には海岸線のない県が8つあり、埼玉県もその1つ。いわゆる「海なし県」だが、同校が立地する川口の地名は、東京都との境を流れる荒川の河口を意味するのが由来だという。

そうした立地環境に照らすと、海の珍しさや都会への憧れなどが、旅行先の選定に関与したとは考えにくい。では、修学旅行に対して学校が何を求め、生徒たちが何に感動したのか。今回の修学旅行を担当した浅井紀子教諭は「豊かな自然の中で、日ごろできない体験を通して、そこから得るものを期待した」という。生徒一人ひとりの個性や持ち味を育てる学校の方針に照らせば、感動もさまざまあっていいはずだが、生徒の感動は和歌山での体験を通して、地域や受け入れ家庭の人々との「触れ合い」に集中している。実は、それが狙いの1つでもあった。

民泊家庭の受け入れスタイルはさまざまだったが、生徒へ与えたものは「感動」の一語に集約された

浅井紀子教諭

「都会の疑似体験的な生活を離れて、自然の中で身体を動かすこと」（浅井教諭）から、バーチャルではないリアルの感動を得ることだった。

生徒が抱いた感動は、まさにリアルがもたらした結果だが、それは周到な事前計画と「生徒が主体的に準備する」などの事前学習の賜といえる。

熊野古道を歩く

カヌーの体験

今回の修学旅行では、テーマとして「体験」「コミュニケーション」「エコロジー」の3点を据え、それらを日々の生活に欠かせない「食」でつなぎ合わせた（別項参照＝学年会資料から要約）。

事前学習では、民泊先での食事づくり体験を想定して「生徒の日頃の食生活を調査し、修学旅行の計画に反映させた」（齋藤美樹子教諭）のをはじめ、和歌山の梅や、省エネの一環として校舎のベランダで栽培したグリーンカーテンのゴーヤも調理した。さらに、旅行先の串本町から海中公園センターの宇井晋介館長、漁業組合の吉田俊久組合長を招いて話も聞いた。これらは、3つのテーマが相互に関係し合い、そして食に収斂（れん）している。

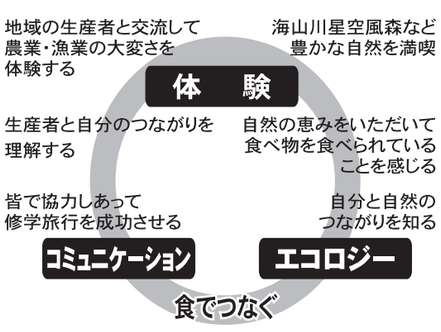
修学旅行の行程では、1、2日目に和歌山県「ほんまもん体験」のフィールドである串本町で民泊し、3日目は神戸市内のシティホテルに投宿している。この間、生徒は2日目の終日と3日目の午前中に、ほんまもん体験のメニューに参加した。また、神戸では午前中に班別自主研修を行った。

このうち2日目の体験メニューは①シュノーケリング＋まぐろ養殖（32人）②シーカヤック&無人島＋海中公園（43人）③ドルフィンスイミング＋海中公園（44人）④熊野古道＋ドルフィンスイミング（30人）⑤カヌー＋ひものづくり（27人）⑥まぐろ缶詰づくり＋カヌー（35人）⑦シーカヤック＋釣り公園で釣り（46人）⑧まぐろ養殖＋くじらの博物館&民芸品絵付け（23人）――など。3日目は、うどん打ちや炭風鈴づくりほかをクラス別に実施した。

学校での調理実習

また、民泊自体がテーマに据えた体験でありコミュニケーションそのものだった。「表情が豊かになり、会話の中に自然な笑いが多くなった。民泊先の方々からの影響でしょう」（齊藤教諭）と大きな効果を得ている。

同校では、08年にも和歌山県への修学旅行を行っているが、09年は沖縄だった。今回の生徒の中には、沖縄を羨（うらや）ましく思う気持ちもあったが、旅行後には「和歌山でよかった」に置き換わっている。また、08年に和歌山を経験した兄姉のいる生徒が「和歌山のよさを聞き知って、沖縄羨望組にあれこれ説いていた」（内田茉希教諭）のも、学校側ではきちんとウォッチしていた。それは、学校における修学旅行先に向けた伝統の芽生えかもしれない。そして、今後2年は和歌山が修学旅行の「体験ステージ」になる方向性も出ている。



毎日誰もが口にする食べ物は、元をたどればすべて自然のもの。自然があるからその恵みを、毎日あたりまえのように口にすることができる。しかし、人間が自然を汚染すれば、それは自分の食べ物にはねかえってくる。また、食べ物の生産者は、人間の思い通りにならない自然を相手にして工夫を重ねて生産している。都会の消費者はそのような生産者の知恵や苦労を想像して、食べ物を大切にしなければならないのだが、それは普段の都会暮らしのなかでは、なかなか難しい。

今回の修学旅行では、和歌山の豊かな自然の中に飛び込んでいくことや、生産者の人々とコミュニケーションをとることを通して、生徒が自分たちの生活や意識を見直す機会にしたいと考える。

新渡戸文化高等学校
沖縄　4泊5日　10年4月　実施

行程前半では平和学習 戦時と現在の違い体感

東京文化高等学校から昨年4月に校名を変更した東京都中野区の新渡戸文化高等学校（長本裕子校長）。創立は1927年。前身校、女子経済専門学校の初代校長が新渡戸稲造であることからその名を冠した。新渡戸の弟子で創立者の森本厚吉氏が豊かな人間力を育むために必要と考えた「3H（Head,Hands,Heart＝活（はたら）く頭、勤（つとめ）しむ双手、寛（ひろ）き心）」を建学の精神とし、新渡戸のモットー「Sense of Proportion」（違いを認めあう心）を教育目標に掲げている。

長本裕子校長

片岡鉄平教諭

修学旅行は毎年、2年次の4月に実施している。ここ十数年の行き先は沖縄。重視する「平和学習」に加え、「自然体験」もできる地域だからだ。

校外学習としての修学旅行の目的は「教室で学んだことを実地に観察研究することによって学習効果を高め、社会的視野を広める」。あらかじめ教室で学んでいることが前提であるため、事前学習には力を入れている。

1年次では、生徒をグループに分け、沖縄に関して、地理、歴史、風土、自然を含めたさまざまなテーマをグループごとに調べさせる。片岡鉄平教諭は「多くの生徒が自然やアメリカ軍基地などの漠然とした知識や一面的な情報しか持っていないため、平和学習だけでなく、総合的に沖縄について知る事前学習に取り組んでいる」と説明する。

間近に迫った2年次の4月には、社会科や音楽の授業で沖縄を題材に取り上げるほか、沖縄戦を描いた映画『GAMA―月桃の花』も鑑賞させた。

前回の沖縄への修学旅行は昨年4月19日から23日までの5日間にわたって実施。2年生の全2クラス、33人の生徒が参加した。

ガマで話を聞き平和への思いを新たに

ひめゆりの塔で手を合わせる生徒たち

座間味島での記念植樹

島の人との交流

マリンスポーツも満喫

行程の前半に平和学習をあて、初日と2日目に、ひめゆりの塔、平和の礎、沖縄県平和祈念資料館、佐喜眞美術館などを訪れた。沖縄戦の遺物や資料を見て、また、ガイドの話を聞いて、戦時のことやアメリカ軍基地問題などを詳しく知った。

読谷村では、避難した人々が全滅したガマ（洞窟）と全員が生き残ったガマを見学。読谷村の語り部から2つのガマの違いがどこにあったのかも教わった。生徒たちは、助かった方のガマに入り、手に持っていた懐中電灯の光を消す。暗闇の中、当時の生活や人々の思いをそれぞれが感じとった。

「ガマや、米軍基地がたくさんある状況などを実際に見たり体験したりして、生徒は平和に対する思いを強くする。特に戦争当時と今の美しい自然とのギャップを感じる子が多い」と片岡教諭。

修学旅行は、同校の目的にもあるように「実地で行う」ことに意味がある。

長本校長は「文章や先生から得た情報よりも、自分の肌で感じたことの方が生徒には印象深く残る。実際に体感することは教育効果が大きい」と断言する。

3日目は沖縄本島から高速船で座間味島へ移って動。古座間味ビーチでシュノーケリングやバナナボートなどマリンスポーツを楽しみ、海や生き物など沖縄の自然に触れる。この日だけはホテルではなく、阿真地区の3軒の民宿に分宿した。

4日目は島内見学と記念植樹を行い、那覇市に戻る。最終日は守礼門や首里城などを見学し、国際通りでの班別自主研修の後、帰途についた。

修学旅行の後半は自然体験を学習の軸としているが、その美しい自然に劣らないほど生徒たちの心を引きつけたものがある。それは島の人々だ。

島での夕食時には、生徒全員でバーベキューを食べながら、阿真地区の人たちと交流した。民宿のオーナーなどが太鼓や三線を演奏し、民謡も歌ってもてなすと、生徒たちは流行の歌や踊りなどを披露して礼を返す。それぞれの分宿した先では、民宿の人たちがさまざまな話をしてくれる。

翌日、島を離れる時には、世話になった民宿の人たちとの別れを惜しんで号泣する生徒も多い。「たった1泊でも深い交流ができたみたいだ」（片岡教諭）。そんな島の話は先輩から後輩へと代々伝わっていくため、次に行く生徒は島への訪問を楽しみにして待っているという。

沖縄での修学旅行について片岡教諭は「学校では普段見せないが、こんな感受性の豊かな子たちなんだと思うぐらい、いろいろなことを感じ取ってくる5日間になっている」と評価する。

長本校長は言う。「読谷村の語り部は体全体で怒りなどを表現し話してくれるので、聞いていて感じるものがある。一方、島の人たちは素朴な人柄で、私たちを一生懸命迎え入れてくれる。トータルで修学旅行を見ると、生徒たちを感動させるのは、人とのふれあいだ」。